

a

s

s

a

g

e

ひとりという幸福



坂口三千代

Sakaguchi Michiyo

バサージュ叢書

2

メタローグ

ひとりという幸福

坂口三千代

Sakaguchi Michiko



ハサージュ叢書

2

メタローグ



パサージュ叢書 2
passage collection

ひとりという幸福

坂口三千代

1999年5月8日 第一刷発行

責任編集
高丘 卓

造本設計
巖谷純介

装画・ロゴマーク
多田 順

発行者
今 裕子

発行所
株式会社メタログ

〒102-0093 東京都千代田区平河町2-12-2 藤森ビル
TEL.03-5275-1595 FAX.03-5275-1598

印刷・製本
株式会社シナノ

定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁は小社宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

©1999 TSUNAO Sakaguchi, METALOGUE Printed in Japan
ISBN4-8398-3007-X

ひとりという幸福 ● 目次

I
ひとりということ

亡き夫へ 8

開店そのころ i 26

開店そのころ ii 32

II
クラクラ日記

ついの棲家で（抄）
40

Ⅲ

記憶のたからもの

安吾忌

114

食べものと安吾

120

安吾と釣りと海

129

遺品

148

IV

安吾と見た夢

写真のパパ

158

長い長い鼻

162

「青鬼作家の禪を洗った女」について

165

その後の十年

171

父子

177

消えてしまう家

183

坂口三千代のパサージユ

川崎大師とパスポート 山本耀司

190

坂口三千代という人 196

坂口三千代略年譜 200

初出・所収一覧 204

I

ひとりごと

亡^なき夫へ

私はいま、貴方^{あなた}の書斎^{しよさい}で貴方の机の前に坐っている。

貴方がいつも使った原稿用紙の残りへ、貴方が使うために旅行の留守中に私がけずっておいた鉛筆で、貴方のことを書かねばならない。

いま考えれば貴方は家へ死ぬためにもどられたようなものです。十五日の晩おそくお勝手口の方からもどられて、「オーイ」と言ったのであわてて私はとび出して行きました。そしておどろいたのは顔がちいさく茶いろく見えたことでした。つかれているなと思いました。鞆^{かばん}をあわてて受取^{うけと}ると「坊やは」とお聞きになった。「ええ起きておりますよ、待たしておいたのよ」と答えると、よほど嬉

しかつたらしく、何遍も、坊やを抱きあげながら「よかった、よかった」とくりかえしおっしゃった。どこからどんなにおそく帰つてもすぐウイスキーを飲む習慣で、その夜も例外ではなかった。「とてもつかれた。もうちよつと早く帰れたのに飛行機が遅れて新橋の五時何分に間に合わなかった、仕方がないから染太郎で八時までひまをつぶした。けれども坊やが起きてくれて本当にうれしい、ねちやっていると淋しいなと思ったんだよ」。そう言いながら鞆をもどかしげに受取つて中をかきまわし、坊やには飛行機でお八ツにでたお菓子と、私には「これはお前のお誕生祝いだ」と言いながら、土佐産のサンゴの首かざりを二ツ出して下すった。一つは百合の花を彫つたペンダントで、も一つはサンゴの粒をあつめたおじゆずのようなものだった。それはピンクの優しい感じのものだった。私はうれしくてたまらなかった。

二月の七日が私の誕生日であり、その時は都合がわるくて旅行先きでという約束であった。私はもうとうに忘れていることと思ひまゐるであてにしていなかった

から、有頂天^{うちようてん}で子供のように首にかけてみたり、はずしてみたりして楽しんだ。「粒の方はじゅうずに見えて嫌だったけどお前がそんなによろこんでくれるなら買って来てよかったよ」とおっしゃった。「それでは記念のために箱に何か書いて下さいね」とたのむと、よしよしと言って『土佐に日本産サンゴあり土佐の地に行きてもとめ三千代の誕生日におくる』と筆で書いて下さった。そしてこれが坂口の最後の字になってしまった。その晩は五日ほど留守にしていたパパをなつかしがって膝^{ひざ}から離れない坊やと三人で二時すぎまでおしゃべりをしていたが、坊やがねむり、私にもねるようになるといい自分はしばらく新聞を読んでいたようだったが、やがて二階にあがって行かれた。

十六日は朝から「今日はパパが坊やをお風呂に入れてやるよ」と言っていた。パパが坊やをお風呂に入れてくれるのはこれで三回目か四回目かであるからもちろん私はうれしかった。父と子と喜びあう様子をみて楽しくない妻はいないはずだ。けれどもひどいつかれの様子であんまを呼んでくれるようにと言ってストー

プのあるお茶の間で床をのべて横になった。二時間余りあんなにかかったあと、「頭痛がするからケロリンを頂戴」と言うので、先月の中央公論の『富山の薬と越後の毒消し』の中で私の悪口を少々いったから仇をとるつもりでいたずら心がおきた。「そんなものはございませんね」と言う。「ああ間違った、あれはテルジンとか言った」「あやまればあげましょう」というと笑いながら「どうも」といった。そのあとよと言うと、も一度「どうも」とおっしゃったのです。

そうして十七日の朝。

茶の間にそのままやすんでしまわれた貴方は次の間にねむっていた坊やと私におふとんを掛けに来て下すった。寒い朝でした。けむりの来ないように間のカラカミを閉め切って自分でストーブをつけて下すった。坊やがむずかり始めたし、この頃は坊やが寒くないようにといって時々ストーブをつけて下すったのであまり気にとめなかった。「みちよ。みちよ」と二度ほど呼ばれて、声が少し変な感じだなど思いながら行ってみると「舌がもつれる」といって、手まねで窓を開け

ることとストープに石炭を入れることを言われ、「いつたいどうなさったの」といいながら貴方^{あなた}がいつも石炭の煙がとでも嫌いであつたから窓を開けながら「舌がもつれる」と言つたので、もしや脳溢血^{のういつけつ}ではと思つてふりかえると貴方は静かに横になられるところであつた。抱きかかえるようにしてその場に横にさせると、私の顔をみて何かいいたいように見えたのですが、言葉にはならなくて両腕をちぢめ全身が痙攣^{けいれん}しておりました。あわてた私は「待つて下さい、今お医者に電話します」といつてお医者を呼んだのですが、十分か十五分の間のまちどおしかつたこと。寒そうなのでおふとんをかけたり窓を閉めたり、また貴方の側^{そば}に走りよつたり、も一度お医者に電話したり、その間いつペン起きるような仕草^{しぐさ}をなさつたのであわててとどめました。やつぱり脳溢血かしら、私の頭の中はそれで一ぱいでした、それからお医者様が見えた時にはとうに意識は失つておられました。舌がもつれるとおっしゃつた以外は私が何をいつても御返事もないし、いつから意識を失われたかもわからない。お医者様が二人で必死になつてあらゆることを

して下すつたようですが刻々に心臓は弱まり意識は再びもどりませんでした。

舌がもつれるとおっしゃってから一時間半ぐらいしかたっておりません。御臨終といわれても心臓がとまってしまっても、貴方の場合に限り死なんてことが考えられるだろうか、死ぬなんて、こんなことで死ぬなんて。私は生涯を通じてこの時のことを考えると混乱してしまいそうだ。

お通夜も告別式もすんで今日は十日目です。が、いったい私は何をしていたのだろう。何も彼も皆様がより集まってやって下さいました。お通夜の晩は尾崎士郎さんも檀さんも、小林秀雄さんもお見え下さいましたが、きつい表情でいらしたので私の心はおびえてまいりました。私が大切なお友達をとりあげてしまったような気がしてとてもおこつていらつしやるのだと思つたのです。でも、それはやがて違つていくことがわかりました。石川淳さんが伊香保からお見えになって、お帰りの間ぎわ、坊やを抱かれてさめざめとお泣きになりました。それはもう、

とめどなく涙を流されました。それをみているうちに私のおびえた心がだんだんにときほぐれ、ただただ惜^おしんで下さるお氣持がひしひしと胸にこたえてまいりました。そしてこんな席にも貴方がいらしたらとそればかり。

それにしても、貴方は亡くなる前日の二日間私たちにありつただけのサービスをして下すつたのは、もうお別れであつたからでしょうか。私にはかえつてそれが苦痛になりました。もう一度貴方が黙つてウイスキーをお飲みになつている傍^{そば}で黙つて坐^{すわ}つていたい。それは不思議なやすらぎで、もう何もしゃべることがなくなつても自然でありました。そんな時はよくラジオの落語やクイズを聞きましたね。それは私たちお互^{たがい}に相手の笑い顔を見たかつたせいもあるし、貴方が荒れ狂つたあと孤独な思いにしめつけられていた時などほつとしたものでした。

荒れ狂つたあとの貴方はなんというさびしい顔をなさつたでしょう。何と云つて表現したらいいのでしょうか。荒れ狂っている時の貴方のことは未^まだ思い出ともいえぬくらいに私には生々しい。貴方の生活は開^あけっぱなしであつたため、周囲